【書評】

時代別国語大辞典 上代編

馬淵和夫

待望の時代別国語大辞典上代編が、昨秋文化の日を期して発刊された。千五百年の歴史をもつ日本語の、本格的な歴史辞書の第一巻が誕生したことの意義はおおきい。辞書のことを論ずる、いわゆる識者なるものが、欧米の辞書との比較において、わがくににいまだ歴史辞書のないことをなげき、その責任の全般を国語学者におわせんとする風潮のあることをしっているわれわれとしては、まずこの企画に多大の賛意を表し、ついで第一の巨弾をはなたれた編集委員会に満腔の敬意と讃辞をささげたい。

ひるがえってかんがえてみるに、千五百年のあいだ連綿として継続してきた一言語の歴史をえがくということは、世界でもそれほど容易におこないうることではないのである。われわれは、すぐ近隣に中国・インドという世界最古の文化をそだてたくにぐにをもっているため、すぐにそれとの比較において日本語の歴史のあささをかんがえがちであるが、これを現在文運の隆盛をほこるヨーロッパの諸国語とくらべてみれば、決してみじかいものではない。まして東洋の諸言語のなかでは、中国・インドについでその歴史のふるさをさぐりうる言語であるといってよいであろう。したがってその歴史をあきらかにすることは、世界における言語の学問のために非常に貴重であることはいうまでもない。ただし、ヨーロッパの諸言語が表音文字によって記録されたために、口頭語の歴史をさぐるうえにわりあいに有利であったのに比して、漢字を表記の主体としてきた日本ではその点がひとつの障害であった。これが欧米の歴史辞書に比してわがくにの歴史辞書がややたちおくれた理由であろう。これはそれぞれの言語記録の手段の相違のしからしめたところであって、国語研究の学が世界の言語の学の水準に比しておとっているからであるとは、わたくしにはかんがえられない。

しかし、日本語の歴史辞書の必要性は、ヨーロッパ言語学の輸入以来学者のあいだでは痛感せられ、松井簡治先生の「大日本国語辞典」、大槻文彦博士の「大言海」などはその機運のもとにうまれたものであった。しかしながら、橋本進吉先生による上代音韻組織の解明をはじめとする学問の進展は昭和十六年にすでにこれらの辞典をふるいものと評価せざるをえない状況となってきていた。ここに時代別国語辞書の編纂が企画されたのである。この大事業は、昭和二十年はるには戦争のために中断されたが、三十年から再開され、

このたびようやくその第一冊がでたという次第である。学問の進歩というものは停止するものではないから、二十年前にでるよりも、二十年後にでたものの方がよいことは一般的にはいいうることであるが、この二十年の学問の進展のみならず、社会の思想の進展、および学問の自由の点からみても、現今の方がより適切な時代であることはいうをまたないし、今後二十年にわれわれが現在よりも学問・研究の自由をもちうるかいなかも保障のかぎりではないのであるから、このような現在の学界の最高水準をしめす業績がでたことは、この意味からも結構なことといわねばならない。

本辞典は、B四版、千百五十ページの堂々たる大著である。本文八百四十一ページのほかに、付録として巻初に、上代語概説をおき、巻尾に、上代語助数詞一覧、上代の諺、干支・月名について、氏姓とその制度、冠位・位階の制度、資料解説、主要万葉仮名一覧表、建物部材名称および索引をすえて、上代語・文献理解の万全を期しており、懇切綿密な配慮というべきである。ことに上代語概説は、本辞書編纂の基底となるべき上代語観および学説をしるうえに貴重である。それと同時に、上代語についての概説書としては、現在みうるもののなかでもっともよくまとまった、しかも諸説をひろく摂集した穏健な叙述である。ただし、初学者への入門書ではないから、参考とすべき諸書・諸論文のなまえが一切みあたらないのは、やむをえないが、残念でもある。

さて、辞書というものは、ある目的をもって語彙をあつめ、その音義を解明せんとするものであるから、われわれは、できるだけその意図を解明し、ただしく理解し、またその意図が十分にはたされているかいないか、またこれを使用するものにとって十分つかいよいように工夫されているかどうかなどの点について批評すべきものであろう。

以下こうした見地から、若干の批判めいた言辞を弄することをゆるされたい。

一、時代別というかんがえかたについて

時代別国語大辞典という企画は、たしかにひとつの合理的な意図をもっているとおもう。日本語の歴史をながめたばあい、いくつかのおのずからなる区ぎりが存在するものであるから、「一挙に全時代に通ずる歴史辞書を完成する」（刊行に際して）一歩まえにおいて、それぞれの時代ごとにまとめてみるというこころみは有益であるとともに妥当である。しかし、その企図の根底に、かのソシュールのいうところの共時態という観点から国語の歴史を切断したものではないかという懸念もある。たとえば、「上代語概説」中、

国語史的に眺めても、上代語として共時論的に取り扱えるのは、七、八世紀奈良時代の日本語であって、奈良時代と平安時代との間には非連続な面が著しいようである。（ペ（一三）中段）

とあるのは、おそらくそのことをいっているのであろう。しかし、歴史辞書をめざすかぎり、いくら上代という時代を区切ったとしても、根本的には一語一語の音義の歴史を解明しようという態度を保持すべきであろう。共時態という概念は、ソシュールもいうごとく、「記号の体系における関係」（小林英夫氏、改訳新版ペ一〇八）を研究する分野なのであって、いわば時間的にはゼロなのであり、時間的ゼロはいくらつみかさねても歴史はうまれてこないはずである。往々にして、各時代の共時態の研究をつみかさねていけば、それが

通時的な研究になるというようなかんがえがあるが、ソシュールもいうごとく、このふたつの研究は別の次元の問題なのである。歴史辞書を編纂しようとする際には、われわれは、一語一語がすでに歴史をもったものとしてかんがえているのであって、それを無視することは、「飛矢不飛」という形式論理上のあやまりをおかすことになる。

みぎのような観点から本辞典をみるばあいには、ある語について千五百年の歴史を解明するよりは、四百年の歴史を説明する方が、処理の方法としてより容易であり、あやまりがすくなくてすむ、という程度に了解すべきものとおもう。この点から本書の各語の説明を一見すると、ややその点の解明にふかみがたりないという気がする。もっとも、現存の上代語資料から如上の歴史的展望が可能か、という点になると、その困難さはみとめざるをえないし、見解の相異という点もある。したがって、辞典というものの性格からみて、あえて危険をおかすべきではないというたちばも十分尊重されねばならないであろう。しかし、わたくしにもこの見地からものした小論があり（「上代語の清濁に関するひとつの見解」〈言語と文芸44、昭和四十一年一月〉）、それにとりあつかった若干の語が、本辞典ではどのように解説されているかをみてみた。すると、「ありかよふ」「いたと」「つるき」「はたすすき」などには清濁両形をみとめるような〔考〕があり、「なみた」には、

古く清音だったのが、のち濁音になったのかもしれない。

「はろはろに」には、

第三例を除いて、仮名書きの例はハロハロと清音で表記している。大伴家持のころに至ってハロバロの形が現われたか。

という興味ある〔考〕がついている。編者にもこのような歴史性への志向が十分にうかがえる以上、もっと徹底してもよかったのではないか。

二、上代語の下限

上代語の上限については問題がないとして、その下限についてはかなり異論の生ずる点がある。本辞典は、その下限を、単に平安遷都のおこなわれた七九四年をもって区切ることをせず、いわゆる吉沢義則先生の国風暗黒時代を、上代と中古の区ぎりの時期とみようとしている（上代語概説、ぺ（一三）中段）。これは穏当なみかたといえよう。資料の点からみても、万葉集や仏足石歌は上代語資料としてうたがう余地はないが、これらとおなじ地域において、おなじ文化が継続していた基盤より作成されたとかんがえられる霊異記や、新訳華厳経音義私記などが、やはり上代語資料の主文献としてとりあげられたのは当然であろう。そうとすれば、七九六年（延暦十五年）の秋篠寺善珠「成唯識論述記序釈」や、年代未詳ではあるが、空海「金剛頂経一字頂輪王儀軌音義」、または、「新訳華厳経音義私記の材料とも成った」（岡田希雄氏「新訳華厳経音義私記倭訓攷」）といわれる、「大治本八十華厳経音義」（もっとも、その倭言は、私記とほとんどかさなるが）も採用してもよかったのではないか。

国風暗黒時代のはじまりをわたくし流に解釈すれば、奈良時代の奈良のみやこの文化はなお主として南都の諸大寺において継承され、新都においてもまた奈良朝の貴族・官人のいきのこりが文化のにないてであった時代ということになるのであろうから、奈良がわの資料としては遷都後三・四十年ぐらいまで、京都がわの資料としては遷都後二十年ぐらいまでのものは上代の範囲にいれてよいであ

ろう。前者としては八二三年（弘仁一四年）の霊異記、後者としては八〇八年（大同三年）の古語拾遺までをいれるのは妥当であろう。そうしてみると、問題となるのは、空海の著述、書紀古訓と、和名抄所載の楊氏漢語抄・弁色立成の倭訓などであろう。これは編者の見識にまつよりしかたがないが、編者は書紀古訓をひろい、空海および楊氏漢語抄・弁色立成をすてた。わたくしはむしろこの反対の方がいいようにおもう。

三、見出し語の種類

所収語彙としては上代語の全語彙が期待されるが、固有名詞および字音語は除外された。これは残念である。つまり、上代における固有名詞の命名はかなり一般語彙的であり、それによって語源をたどれるばあいもあるし、また上代語の語構成のありかたをしるためのてがかりともなりうるはずである。勿論そのばあい、古代朝鮮語の固有名詞は厳密に排除しなければならないが、それは別に困難なことではない。

字音語については、できるならば編者の見解をききたいとおもっていたが、これはこの方面の研究の現段階としては無理な注文であろう。しかし、たとえば万葉集の左注などでどんな漢字の熟語らしいものがあるか、ということを、どうよんだかということはわからぬにしても、その字面をみせておくという工夫はあってもよかったのではないだろうか。万葉集巻一、八番のうたの左注に、「西征」「海路」「感愛」「歌詠」「哀傷」などの字面があり、日本古典文学大系のよみくだしにおいては、これらの字を音読している。実際はこれらは音読したものか訓読したものかはわからないが、すくなくともそういう字面をのこした語が当時の日本語のなかには存在していたはずであるから、それもわかるようにしておくということも、後世の研究者のためには意義あることとおもうのだが、これは無理な注文かもしれない。

四、みだし語のたてかた

原則として語をおもなみだし語とすることは、国語辞書の慣行といえるとおもうが、どこまでを語とするか、ということは編者の判断による。本辞書の編者は、語を単語と複合語とにわけ、複合語のうちで、「語の単なる連接にすぎないもの、複合度の弱いもの、間に助詞ノなどを含む多くのものは、必要な範囲で採るに過ぎない」（凡例、ペイジ（六）中段）という方針であるが、これが実はなかなか客観的には決定できないことなのである。

たとえば、古事記・神武天皇の歌謡に、「伊波比母登富理（い這ひ廻り）」という語がある。辞書でこの意味をしろうとすれば、「いはひもとほる」という語形でさがすのが普通であるが、この辞典ではその語形ではでていない。「もとほる」というみだし語はあるが、「いはひ」もしくは「いはふ」というみだし語はない。勿論、「はふ」というみだし語はあるが、「い」「はひ」「もとほる」とみっつに分解しなくてはこの語はひけないということになる。これは「一般教養のため」には不親切ではないだろうか。また、古事記・雄略天皇の歌謡に「多古牟良爾 阿牟加岐都岐（手こむらに虻かき着き）」というのがあり、その「かきつく」をしらべようとすると、これも「かき」と「つく」にわけなければならない。万葉集巻十四、三四五番のうたに、「可伎都楊疑」という語がある。「かきつ

やぎ」という音連続から、「かきつ」は「垣内」であり、「やぎ」は「柳」であるという分解ができれば、もうそのひとは辞書をひく必要などないようなものである。やっぱりこれもみだし項目としてほしいものではないだろうか。

みぎのような点から、みだし語のたてかたにどうも不審がでたので、「こ」の部のみだしについて検討してみた。

みだし語としてたてた方がよいとおもわれる語

こぎあふ〔漕ぎ会ふ〕∧万・一二〇〇∨　こきいる〔扱き入る〕∧万・一六四四∨　こぎみる〔漕ぎ見る〕∧万・三九九一∨（「漕ぎ廻る」はある）　こぎりく〔漕ぎり来〕∧万・三一二五∨　こなに〔来なに〕∧万・三四六一∨　こに〔濃に〕∧記・応神∨　こぬれがくる〔木末隠る〕∧万・八二七∨　このはごもる〔木の葉籠る〕∧万・二六六六∨　こはだをとめ〔古波陀嬢子〕∧記・応神∨　こひみだる〔恋ひ乱る〕∧万・二五〇四∨　こひもふ〔恋ひ思ふ〕∧万・一〇二∨　こひやむ〔恋ひ止む〕∧万・三三〇六∨　こひわたる〔恋ひ渡る〕∧万・五八八∨　こもらひをり〔隠らひ居り〕∧万・二一九九∨　こもりこふ〔隠り恋ふ〕∧万・三九七三∨　こめち〔古米知〕∧万・四三四三∨

見出しにはたててあるが、一語とはおもわれない語

こころあり（動ラ変）　こころいたし（形ク）　こころしらふ（動四）　こころつく（動下二）　こころつくす（動四）　こころつごく（動四）　こころなし（形ク）　こころゆも（副）　こころよし（形ク）

また、

こころがなし（形シク）　こころぐるし（形シク）

などは、連濁しているから一語であるとするならば、まえに指摘した、「こぬれがくる」「このはごもる」などの方がより密接な複合であろう。

いま、ただ「こ」の部のみの一見でその一端をしめしたにすぎないが、わたくしの真意は、あらさがしをすることではなくて、これほどの大著である以上、なぜ複合語をもすべてみだし語としなかったか、という点にある。全部いれたとしてもそれほどの分量の増加とはならなかったであろう。そしてその方が上代語の辞典としてはふさわしいし、利用者にとってより便利であろうとおもう。

以上本書のほねぐみについて望蜀の言をはいた。しかし本書の真の価値はこれを常住座右において使用するときに発揮されるであろう。ほんのかいなでの一見にすぎないが、正確・簡潔な解釈、豊富な用例、平城宮跡より発掘の木簡などの新資料の提供、および綿密周到な考説は、これをしおりとして上代文献の解明をこころざすもの、また上代語研究のおくやまみちにわけいらんとするものへの、こよなき伴侶となることはいうまでもない。この大著をものされた編集委員諸氏に慶祝の意を表し、かずかずの新見によってあたえられるであろう学恩に対してこころから感謝の意をあらわしたい。

—東京教育大学助教授—